

「介護」という言葉が日常的になって久しいが、私たちの中で常に話題になるのが、「姉の介護ロード」である。富山の片田舎で独り暮らしをしていた夫の母に、老人特有の症状が現れたのは二十年ほど前であった。

福岡で暮らす私たちは夫が長男であるため、呼び寄せるしか手立てはないだろうと話し合っていると、富山市内で暮らす長女のS子から連絡があった。

「あんたらは、旅（遠方）におるのやさけえ、私が面倒みるちゃ。心配されんな」。

思いがけない言葉であったが、まず頭をよぎったのは、S子姉と母には血の繋がりはなく、俗に言う”なさぬ仲“であることだった。S子の実母は早逝し、夫の母が後妻として嫁いでいたのである。

そんな心配をよそに、姉は早速、八方手を尽くして環境の良い施設を探し当て、そこへ通うために六十代で運転免許を取った。そして自ら進んで「介護家族会」の会長を務め、かつて保母であった職業を生かして施設の老人たちに童謡などの指導も引き受け、日本舞踊も披露していた。

当時、施設への入居は二年までとの決まりがあり、多くの家族はその対応に苦慮するなかで姉はいつも早めに手を打ち、私たちは新しい施設に移った母を訪ねるだけであったのも、何とも有り難かった。童謡の指導をする姉に、痴呆が進む母が嬉しそうに「私の娘ですちゃ」と言っていた。

母は、八十九歳で安らかに旅立っていった。その間、毎日のようにS子姉が通い続けた自宅からの二十キロの道程が「姉の介護ロード」なのである。

手元に残る施設でのクリスマスの写真のなかで、母が姉に甘えるように寄り添い、幸せそうに微笑んでいる。親の介護を疎んでしまう話をよく耳にするが、継母のために介護ロードを九年間もひたすら通い続けた姉は、まさしく「愛と義の精神」の持ち主と思うが、それは母が身をもって教え育んだ賜でもあるのだろう。